

「路面電車とまちづくりトータルデザインフォーラム」

主 催：都市環境デザイン会議(JUDI)

北海道ブロック・エンジニアアーキテクト協会北海道支部

一般社団法人北海道まちづくり協議会

後 援：札幌市

日 時：平成 25 年 5 月 31 日(金) 18:30~20:00

会 場：札幌ユビキタス協創広場U - cala(サッポロファクトリー1階)

パネラー：光安正太(株式会社 GK 設計)

山岸正美(株式会社マーケティング・コミュニケーション・エルグ)

神長敬(株式会社 KITABA)

コーディネーター：酒本宏(JUDI 代表幹事、EA 協会北海道支部)

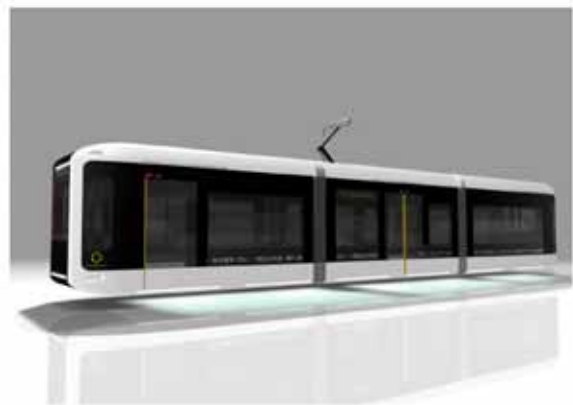
トークセッションより

新しい路面電車が出来るまで

酒 本：先ほど山岸さんから札幌のまちのデザイン、それから、デザイン会議の中でアドバイザーとしてどのようにプロトタイプから今のカタチができたのかお話しいただきました。今日こられた方は路面電車のデザインについてももう少し話を聞きたいのではと思いますので、光安さんから、先ほどの山岸さんの説明に加えることや知ってもらいたいことがあればお話しください。

光 安：都市の道具として路面電車を捉え
るとか路面電車とは一体何なのかを議論
してきました。まちに軌道が敷かれ都市の中
を巡るということは、都市の中の路線価に
も影響しますし、都市のインフラそのもの
をいじるようなこともあります。路面電
車を少し違う視点でみたときに、まちの魅
力を運ぶ「メッセンジャー」的役割がある
のではないかと考えました。札幌市内でも
どこでもそうなのですが、屋外広告物の景

観であったりとか、商売をやっている方々が自分の店やまちの魅力を出していきたいな
という想いもあるのかと思いました。車両の下の方にあるのですが、LED で色々な情報を発
信するような車両を作れないかと思い提案しました。夏の天気や気温、あるいは災害や事
故が起こったりしたとき、そういうときに路面電車が情報を伝える媒体としてまちの中を



走ることができないかと考えました。新しい仕組みとしてそういうことができないか考えたのですが、なかなか難しいこともありました。ハード面や、担い手としても成熟度が高まらない、運用ができないなど難しかったです。あと、車両の下から灯りが少し漏れているのがわかるでしょうか。今まで我々が都市の道具とってきたものは止まっているんです、ベンチとか、屋根とか、あるいは広場とか。そうではなくて、動く都市の魅力として何か出せないかという思いがあり、車体の底から間接照明でぼんやりとまちを照らす灯りを出しています。たとえば、沿線を巡るときに、雪と灯りがマッチングしながら情緒がある路面電車ができないかという提案もしていました。冬の路面電車の走行状況を見させていただきましたが、非常にハードルが高く、一晩経つと凍った雪が電車の底にへばりつき、ハンマーで叩き割り壊してからでないで発車できないくらい厳しい状況でした。今回5月に運行しましたけれども、恐らく色々な課題が出てくると我々も思っています。しかしながら、みなさんに暖かく見守っていただきながら機能性もデザインも真の札幌らしい車両にせまっていって欲しいという思いがあります。非常にコンセプチュアルな形態からこのような形に変わりましたが、山岸さんが先ほどおっしゃったように、事故が起こってはいけない、壊れたときにメンテナンスが出来なければいけない、ちょっと壊れただけで何ヶ月も修理するような車両は車両じゃない、という議論を散々しました。前面形状を斜めにしたのは、色々な映り込みがあり運転手が運転しにくいということがありまして、継承しながら当初のイメージを保ちつつも、当初のクリーンで透明感がありシャープにという思いを実現させたという点で非常に良くブラッシュアップされたと思っております。

あとは、札幌市さんにも「札幌市のプライド」というところがあるのかと思ひまして、これを実現させるための尽力はものすごかったんだろうと思います。また、単に札幌市内だけではなく、路面電車などの業界でも非常に話題の車両でして、純国産、国内で一から作ったという、車両メーカーのアルナさんのプライドがあったんじゃないかと思ひます。結果として非常によく出来ていますけれども、やはり冬季を乗り越えられるのか、こういう課題を解決しながら真に札幌の車両として定着させていけないのではないか、というふうに思っています。



LRTの導入によって「わが街・札幌」がより見えてくる
市民に愛される札幌の新しい表現



酒 本：はい、ありがとうございます。「さっぽろ・プライド」ですね。先ほど山岸さんから6回の会議でブラッシュアップされていったという話でしたけれども、神長さんにデザ

イン会議 6 回で、「さっぽろ・プライド」はここだったんじゃないかという、プロセスの中のさっぽろ・プライドが何かあれば、苦労話でも良いのでお願いします。

神 長：苦労話ですが、時間が無かったですね。時間が無いなかでインテリアから外観まで決めないといけない、プロモーションまで併せて進めていけないといけない。すごく綿密な作業を進めていかなければならなかったのも、そこがとても時間的にも大変でした。あとは、山岸さんのお話しにもありましたが、これは赤がいいだとか、スラント形状がいいだとか、具体的なデザインになると好みの話が出てきてしまうんです。これはデザイナーがどのような形で対応していくかを常に議論していくのが、楽しさでもあり大変な部分でもありました。あと個人的には、形状もさることながら、今の電車の広告、ラッピングについて賛否両論ありますが、あれがちょっと下品じゃないかという意見もあります。広告を出すのが駄目なのではなく、ちゃんと設けたいということで下に電光掲示板で映すということも考えました。車内も、中吊りなど紙媒体ですが、先ほど紙媒体を仕事にされている山岸さんから、ご自身の仕事を否定するようなことにもなるのですが、これから先を見据えると、紙媒体じゃないよという話をされていました。ラッピングコントロールも含めて、車内広告を禁止するのではなく、きちんとルールを決めてコントロールしてやっていかなければいけないのでは、というアドバイスをいただいて、今のところきれいに出来ています。単にデザインするだけではなく、ルールや運用をどうするかといった細かいことを考えていかなければならないということが、楽しくもあり大変でした。

酒 本：はい、ありがとうございます。デザインを通して、車体のデザイン以外にも沢山議論するべきところがあって、短い期間だから大変だったということでした。

新しい路面電車からまちへの「素敵連鎖」

酒 本：新しい路面電車のデザインだけではなくて、当初の「さっぽろ・プライド」のコンセプトがあり、これをまちにどう活かしていくかというのが今日のテーマです。新しくカッコいい電車がまちを走りますが、どうやって活かしていきましょうか。さて、光安さんが先ほど触れていたのもちょっとご紹介を、光安さんならこう考えるということをお話し願います。

光 安：ここは非常に難しいところでもありまして、できれば今日ご意見やアイデアを会場から欲しいですね。

酒 本：そうですね、まずは光安さんからご意見いただいて、会場の皆さんからのご指摘やご意見いただきたいと思います。

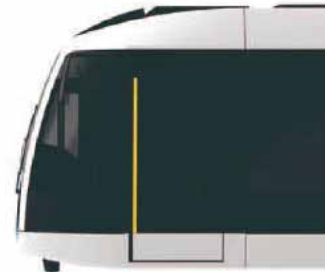
c 光 安 : 私もまだ、その辺のアイデアがあるわけではないです。これからそのアイデアを色々な方々と議論していく、あるいは色々な方々がその担い手になっていくのが非常に大事だと思います。電車は「CRIATIVE WIND」というコンセプトで最終的に決まりました。実は、デザイン検討会議の



SAPPORO CREATIVE WIND

創造都市札幌の「先進性」
「透明感のある」気候風土のイメージ、
そして「やさしさ」をデザイン

親善性あふれ人にやさしいデザインの車両が、春の気候を選びながら、四季折々の魅力のあるまちなかを吹き抜け、これからのまちづくりの原動力となります。



中ではまちの中でどうしていくべきかという議論についてあまり時間が取れませんでした。その中で、電車が新しいループ区間を通り、ループ全体を通り、それからまちにとってどういう風にあるべきかということで、会議の中で山岸さんのご提案だったと思いますが、「連鎖」という言葉を使いました。電車が走り出すことで、まちなかで色々な出来事が起こっていることを連鎖させていくことかできるんじゃないか、ということで、この「連鎖」という言葉をキーワードとして、今後のまちづくりのヒントになるのではないかと考えています。先ほども話しましたが、車両というのは、人だけではなくまちの魅力を運ぶメッセンジャーですし、新しい車両に乗ると利便性も増しますし、車両の中から見える風景も違って来る。そういうことで、車両というのはまちのメッセンジャーではないかと思えます。電停というのは、それぞれのまちの表札や玄関だと思います。そのへんをきちんと活用し、沿線のまちの魅力を、ループしながら、電車の中から見えてくるようにできないかと思っています。最後に、通り、特に延伸された駅前通ですけれども、今までの札幌市さんの取り組みから見ると、まちの創造舞台として色々な人が活用できる空間になるのではないかと考えています。そこで色々な楽しいことが起きることで、ループ化された居住地から大通りに出てくるという、そういう場所になってほしいというのを考えています。

富山の例からヒントをいただいたのですが、まちのメッセンジャーというところでは車両を活用し色々な情報を発信しています。たとえば、季節に応じたラッピングなどが行われています。いわゆる広告ラッピングとは一線を画しています。地元のグラフィックデザイナーがきちんとコントロールされており、季節やイベントごとに仕掛けをされています。こういった思いを共有する中でひとつのルールづくりをしながら、まちのメッセンジャーとして活用することがひとつあると思います。また、まちの表札の話を見ると、これは富山グランドプラザの前の電停ですが、ここに昔の風景であったりまちの成り立ちであった



り、そういうものをきちんとデザインする取組みも行っていきます。あとは、こういったフラッグを使いながら沿線の演出をしていくですとか、これはトランジットモールのようになっていく大手モールの風景なのですが、今まではなかったのですが、沿線のカフェからオープンカフェ的な取組みがなされています。確か新宿と大阪の一部に道路占用の特例措置が出ました。そういうことを活用しながら新しいことをやっていけたらと思います。



これはまさにラッピングされているといいますが、電車が桜の季節に桜模様でアピールされると、沿道の方々が自主的に同じことをしています。非常に電車とまちの一体感を感じられ、我々にとっても非常に大発見でした。これはグランドプラザのイベントの様子ですが、こういった場所があるだとか、総曲輪(そうがわ)商店街なんかも少しずつデザインを活用しながら、演出し活気を取り戻したところもあります。こういったところをヒントに会場の皆様から、あと神長さんからも今後の可能性についてのお話を伺いたいと思います。あと、市民の一人一人が都市の道具の担い手となって欲しい。

神 長：さっきの環境と賑わいの素敵連鎖がありましたけれど、これは当初、賑わいの素敵連鎖でした。3回目が4回目の会議のときに、山岸さんが業を煮やしてそのフレーズを持ってきてくれました。なかなか委員の方で自分からそういう提案をもってくる人ってなかなかいないですよね。さすがに痺れを切らしたんだなと思いました。環境と賑わいの素敵連鎖というのが本当にピッタリくるフレーズだなと思い、その象徴的な出来事を紹介したいと思います。富山にはこの仕事が決まってから久々に行きました。富山の名物課長にお会いしてお話しをしたときに、とにかく成功の秘訣は良い車両を走らせることですよと、それができれば色々なことがあとからついていきますから、というお話しをされていました。それは、素敵が連鎖していくこととピッタリ重なるのではないかと思いました。今実感しているのが、受付でお気づきになった方もいらっしゃると思いますが、このペーパークラフトは500円です。私は製造会社の使いではないのですが、500円で買ってきて500円で提供しています。こういうことが素敵連鎖のひとつだと思っています。こういう連鎖が広がっていくと、関係者の意識が高まるだとか、乗ってみようということに最終的に繋がるだとか、沿線の土地の価値が高まるだとか、そういうことに繋がっていくと思います。今日はお見せすることができませんが、南9条通りの電車が交差するところにケーキ屋さんがありまして、「西線ロール」というお菓子ができています。それも環境と賑わいの素敵連鎖なんじゃないかと思います。市民が都市の道具の使い手ということですよ。先ほど我々が色々な活用のプロセスなどの提案をしましたが、良い車両を作れば、良い車両が走り出せば、色々なものがついていく、連鎖していくと思います。どんどん皆さんに関わっていただいて、素敵な連鎖が続いていけばと思います。

酒 本：はい、ありがとうございます。山岸さんにも素敵連鎖について何かお話しをお願いします。

山 岸：会議の中で、ずっとコンセプトについて議論が続いていました。それならこういう風に考えたらどうでしょうかと、出過ぎた真似かもしれませんが、提案させていただきました。それがみさなんにじっくりいったようで、そこからは本来のデザインの議論へ入っていけましたので、多少なりとも貢献できたかなと思います。広告のところで話がありましたが、やはり市電は赤字ということもあり、広告収入は大きなものだという議論がありました。実は新車内の中にも広告を貼れるようになっていますが、出来るだけ使わないほうが良いと思っています。収入という部分では必要かもしれませんが、本来広告を電車内に求めているかということ、市民からみて必要ないものです。ですから、違うやり方で収入を得る方法を考えていかなければなりません。電車は知的であったほうが魅力的であるし、人も集まってきます。札幌のまちの構造は晝盤の目になっていて、非常に合理的に出来ていますが、本当はくねくね曲がっていたり、行き止まりがあるほうがまちとして魅力的だと思います。川は蛇行しているほうが魚が棲みやすかったり、肥沃な大地になるように、まちにもくねくねしている部分が必要だと思います。路面電車が邪魔だという人もいますが、邪魔なのがどっちなのかはわからない。実はまちの中から車というのを排除しても、徒歩や電車の乗り継ぎで移動するほうがよっぽど便利で快適に過ごせるのではないかと思います。そういう意味では、アメリカではダイバーシティという考え方がありますが、色々な多種多様なものがミックスされていくことで生活が豊かになっていくことがあります。電車の停留所の近くに新しいカフェができたり、車だとお酒を飲めませんが、電車だと赤ら顔で乗ってもいいのではないかとということで居酒屋ができたり。そういったように、まちがコンパクトで便利な方向になっていくのではないかとこの路面電車がやってくれるのではないかと考えています。

酒 本：はい、ありがとうございます。新しくカッコいい電車が通るようになって、その周りに自然にお店ができて、という連鎖のお話がありました。

会場との意見交換

酒 本：では、時間がきてますけれども、会場にお越しの皆さんからお三方にご質問があればお願いします。また、電車やこの後はこうなって欲しいというご意見もあれば伺いたいと思います。では、どなたか路面電車のデザインについてお話しきたい人はいますか。

会 場：色々電車の形、四角から斜めの形状になりましたが、LRT自体はそれほど新しいものではなくて、ヨーロッパでは以前から似たような電車がありますけれども、これが札幌にふさわしいということになった、国産でオリジナリティをどこで表現したかとい

うところをお聞きしたいです。

酒 本：これに関しては光安さんですか。

光 安：はい。最初にお話しましたけれども、外から札幌をみると非常に湿度が低いとか透明感があるとか、東京と比べ暑くてもカラッとしていて、日本の北欧というイメージが強いと思います。非常に洗練された感じを出したいということがあり、余計なものは省き、部材の構成も含めて一番最小限に抑えるとプロポーザルのような案になるのではないかと考えました。それを最低限支持しながら機能的な問題を解決すると今の車両になりました。基本的に余計なことをせず、その潔さや札幌の風土や気候、会議で見出したキーワードを基に造形しました。路面電車で走るまちは全国同様に素敵で、例えば鹿児島も非常にきれいで南国の気候風土が表れていますが、あそこにこの電車が走って合うかとなると、絶対に合わないと思います。やっぱりこの車両は札幌ならではの車両だと思っていますけれど、どうでしょうか。

酒 本：はい、ありがとうございます。他にございませんか。今の回答に関連したことでもよいですし。

会 場：今回1両のみの導入ですが、今後2両目、3両目も同じデザインになるのでしょうか。

酒 本：はい。2両目3両目もこれから入ってきますけれども、基本は同じデザインになります。

神 長：すでに2両目3両目が年度末か年度明けに2両くることになっていますけれども、やはり1年間走ってみて、特に冬場など不具合が出てくる部分があると思います。そういうことをできれば2両目3両目に反映させて最終納品というかたちにさせていただきたいと思っています。あれを大きく変えるとなるとまた大変になるので、不具合の修正をしていくというようなことになると思います。

会 場：わかりました。富山の話になりますが、七色それぞれの車両が走っていますが、赤色の路面電車に乗ると恋が実するという都市伝説が高校生の中になるようで、そういうことが素敵連鎖につながるのかな、と思いました。

酒 本：はい、ありがとうございました。

山 岸：口頭でもいいましたが、僕は札幌ショートフェストという短編映画祭をやっている

ます。電車ってやはり絵になるので、そこから生まれる物語がショートムービーになったり、停まっているときにポディーに映画が映されていると、そういったように物語が付け加えられていくと、より親近感もあるし面白みのあるクリエイティブなまちに変わっていくのではないかと考えています。

酒 本：はい、ありがとうございます。路面電車をきっかけにまちの物語ができるのではないかというお話でした。他にご質問やご意見などございませんか。

会 場：今日はありがとうございました。大変興味深く聴かせていただきました。2点ほどありまして、まずひとつが、年間2億円くらい赤字を出してきていることが事実としてあるのですが、赤字も連鎖していくのかということ。もう一つは、札幌オリンピックでモリモリまちが出来た後に、今少しずつ駅前通などでビルが更新され始めていますが、その変化との連鎖というのは考えられているのかを教えていただきたいと思います。

山 岸：赤字に関しては本当に重大な問題だとは思いますが、電車の乗降客数だけで収益を上げるとか報告収入だけで計れない部分があると思います。これがやはりまちの魅力となり人が集まってきたり壁が出来上がったという、経済波及効果が起きないと意味が無いと思います。これがきっかけで出来ていくということ、我々の方でアドバイスが出来れば良いのですが、札幌市さんの方でちゃんと考えていかないといけないと思います。ぱっと解決できるような話ではありませんので、ぜひまち全体で収益を上げるようなことが出来ないか、と考えています。

酒 本：はい、では神長さん。

神 長：都心でビルの更新がこれからも起きてくると思います。私たちも別の仕事で都心のある地域のまちづくりをどうするかという話し合いをしています。当然、路面電車が延伸していくこと、あるいはうちの通りに電車を延伸して欲しい、ということも前提に、ここに電停ができたなら、電停とビルの更新と相まってこうなったらいいな、という声は出てきています。それも素敵連鎖のひとつだと思います。全部の都市開発をトータルに見るということはそうそう無いし、部分部分に関わっていくことしかできないと思っていますけれども、たまたま関わっていくところに電車の延伸の話が出てきているのでそれが関係して絡み合っていくと良いな、と考えています。

酒 本：はい、ありがとうございます。年間2億円の赤字ということがありましたが、赤字の連鎖ではなくて、経済波及効果の連鎖をみなさんで出していくということですね。他にご質問、あと2人くらいいいかがですか。

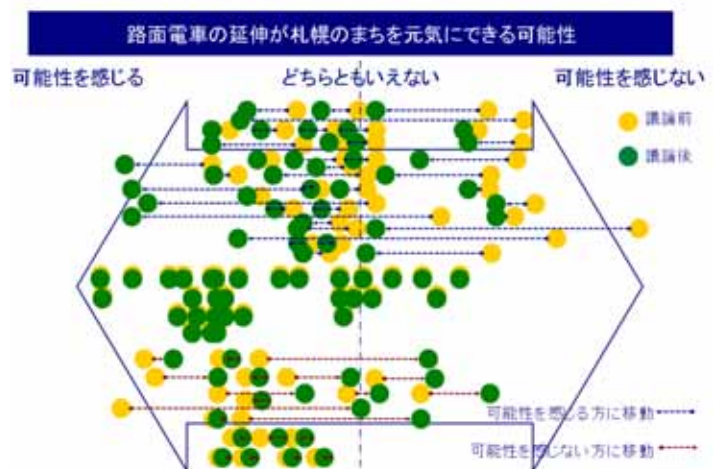
神 長：赤字のことを言うと、赤字はなかなか解消できないみたいです。やっぱりもっと駅とかに延伸しないと駄目だそうです。例えば駅とか苗簿とか。ループ化して新車両が何両か入ったところで、それが赤字の解消に直結しないと思います。シミュレーションにもそう出ていますし。ただ、これをきっかけにして、西線ロールとかですね、消費行動が起きていくことを都市全体で考えると 2 億円の赤字はどんどん減っていくと思います。電車の収支の 2 億円はなかなか解消されないかもしれませんが、都市全体の経済効果が連鎖していけば、このまちに路面電車が残っていて良かったと、まちを元気にしていくことにつながっていいればいいと思っています。

山 岸：札幌のまちの中で空洞化が始まってきて、商業施設があまり売れなく空きスペースが出来たりしています。今、築 50 年の建物が変わってきて、商業施設と住居区をつくるプランもいっぱいあって、町の中に居住する人たちが増えるというような計画をたてています。マンションも規制緩和をして街中にマンションが出来ています。そうすると、お年寄りの人達は、今までは郊外に住宅地を開発して車で都心まで来るといった形をとっていましたが、路面電車で通えるのであれば車を持つ必要性がなくなります。路面電車でちょっとした散歩ができるとか、そういった形でまちが成熟した社会に札幌もなっていくのではないかと思います。そういった意味で、赤字を解消するだけの路面電車ではなくて、まちづくりもキーにもなることを考えていく必要があると思います。

酒 本：はい、ありがとうございます。今、山岸さんの話を聞いて思い出しましたが、市民会議である女性が、私がこれから歳をとったときにまちに路面電車が合ったほうがいいなとか、観光客にこの大きな窓の路面電車で札幌を巡って景色を見て欲しい、という意見がありました。赤字なのは議論で散々出てきていましたが、それでも最終的に、路面電車がまちを元気にできる可能性があるかと答えた方が圧倒的に多かったのは、そういった議論の中で出た意見から、自分が歳をとったときに路面電車が合ったほうが良くて、そうすることでまちに賑わいが戻り人が戻ってくると感じた人が多かったのだと思います。

ということで、他に何かある方いますか。よろしいですか。

■路面電車の活用を考える市民会議：討議前後の意見変化



路面電車とまちづくりのトータルデザインに関わった3人の想い

酒 本：では、今日は路面電車について無理をしてまとめようという感じではないのですが、最後にお三方から想いを頂いて終わりにしたいと思います。では、光安さんから。

光 安：今日は、ひとつのキーワードがまちづくり、もうひとつがトータルデザインということでした。トータルデザインというのは一つのデザイン事務所や一人のデザイナーがデザインするというのではなくて、沢山の人が同じ目標やイメージを持ってデザインすることがトータルデザインだと思います。今回新しい車両を導入したのですが、これからは今回ここにいらっしゃるみなさん、本当は市民のみなさん全員がトータルデザインの担い手となって皆で札幌のまちを盛り上げていく、この動きの柱として目標を明確にすることが大切だと思っています。その中で、赤字の話で暗いのですが、恐らくどの都市でも赤字なんです。皆がトータルデザインの担い手になって、皆で赤字をなくす方法を考えよう、参加した分だけアイデアが出ればそれが肥やしになると思っています。そういう期待を今後こめて、私たちも出来れば参加させていただきたいと思っています。

酒 本：はい、ありがとうございます。神長さん。

神 長：特にお話しすることが無いので、もう一回ダメ押しします。この路面電車ペーパークラフトに関するマイルールを説明させていただきます。それは、ひとつは保存用に、ひとつは組み立て用に2つ買うと千円札一枚でお釣りが出なくて楽です。それが札幌を盛り上げていくことに繋がっていくのではないかと、皆さんひとりひとりがトータルデザインの担い手になっていただけたらいいなという風に思っております。

酒 本：はい、ありがとうございました。では、お帰りの際には2枚買ってください、お願いします。では山岸さんお願いします。

山 岸：札幌は創造都市宣言をしていて、市民ひとりひとりがクリエイティブに創造していったって、新しい自分たちの過ごしやすい、暮らしやすいまちにするために、市民が参加するようなまちになっていくと思います。僕らもどんどん発言して、パブリックなもの自体をクリエイティブにしていかないと、まちは生き活きてこないんで、この電車をきっかけに、皆さんひとりひとりがまちづくりに参加していく良い機会だと思います。是非僕も含め皆さんも参加していくかたちがベストだと思います。

酒 本：はい、ありがとうございます。お三方からは、これから新しい電車を使って札幌のまちを素敵にしましょう、素敵の連鎖を地域の方みなさんが起こしていけるか、という

ところがポイントではないかというお話だったと思います。今は facebook もありますし、路面電車の沿線で素敵なお店ができれば是非 facebook にあげていただくとか、そういうことも連鎖のひとつだと思いますので、何か発見したら共有して路面電車をしっかり使っていただくというふうになっていくといいのではないかと思います。もうひとつ加えますけれども、都市環境デザイン会議と先程ご紹介したアーキテクトエンジニア協会は facebook ページを持っていますので、是非いいねボタンを押していただければと思います。ということをつけ加えて終わりにしたいと思います。

今日は路面電車を中心にこれからどうやってまちづくりを進めていくかということで、何か答えが出たということではございませんが、路面電車を上手く使いながら、札幌のまち、これから素敵な連鎖を起こしていけるように、ということでフォーラムを締めさせていただきます。

長い時間みなさんありがとうございました。

以上